

霞ヶ浦の自然水域で認められたヒレイケチョウガイ交雑種

萩原富司*、白井亮久**、熊谷正裕*、諸澤崇裕*、荒井聡*

*土浦の自然を守る会

**武蔵高等学校中学校

イケチョウガイ *Sinohyriopsis schlegeli* は琵琶湖固有種で野生生息個体数が極めて少なく、現在環境省のレッドリストでは絶滅危惧 I 類に指定されている。霞ヶ浦では 1936 年に淡水真珠養殖目的として琵琶湖産イケチョウガイ約 800 個体が土浦入りに放流された。その後 1952~53 年にかけて琵琶湖産イケチョウガイ約 7900 個体が放流された。その後 1963 年に琵琶湖の真珠養殖業者の霞ヶ浦進出の伴い、野生増殖したイケチョウガイが高値をつけたことを契機に生息調査が実施されている（加瀬林、1965）。琵琶湖への出荷目的のイケチョウガイ漁業であったが、1960 年頃から地元霞ヶ浦で真珠養殖が開始されイケチョウガイは地元でも使用されるようになった。しかし、1975 年頃より水質汚濁等によりイケチョウガイの漁獲が減少した。このため 1975 年以降水質汚濁に強いとされる中国産ヒレイケチョウガイ *S. cumingii* の種苗生産技術が導入された（Shirai et. al., 2010 で）。後に遺伝子を用いた系統解析により霞ヶ浦で種苗生産されているヒレイケチョウガイはイケチョウガイとの交雑種を含むことが明らかにされている（Shirai et. al., 2010）。なお、霞ヶ浦のイケチョウガイは生息数を減らし、漁師の坂本清氏が 1998 年土浦入りで漁獲した冷凍個体が最後の記録と思われる。ちなみに霞ヶ浦のイケチョウガイは 1966 年に真珠養殖目的で青森県の姉沼に導入され、現在も生息が確認されている（白井、2008）。

ヒレイケチョウガイ交雑種は 1996 年と 2009 年に実施された霞ヶ浦における全域を対象とした二枚貝調査においても生息は確認されていなかった（沼澤ほか、1997；萩原ほか、2017）。ところが、我々は 2010 年 6 月に霞ヶ浦小野川入りにある真珠養殖場近傍の用水路でヒレイケチョウガイ交雑種を採集した。2011 年には新利根川河口にある真珠養殖場近傍の用水路で採集された本種が糸賀氏により持ち込まれた。その後、我々は 2014 年にも小野川入りの用水路で採集した。同所における 2019 年 11 月に実施した貝類調査では、本種 4 個体が採集され、自然水域で定着している可能性が高い。

イケチョウガイとヒレイケチョウガイ交雑種は殻高と殻長との比（ H/L ）がそれぞれ 0.60（ $n = 48$ ）、0.82（ $n = 49$ ）であり比較的識別は容易である。両種は稚貝時の殻頂背縁の翼状突起が顕著であり、側面観は三角形で識別が難しい。成貝になると前者は翼状突起が脱落する個体が多く、側面観は長卵形である。後者は成貝になっても翼状突起が残る個体が多いため外見は前者に比べて側面観が丸く、平たい印象である。また後者の殻表の後背縁には放射肋が明瞭であるが、前者は不明瞭である。

霞ヶ浦ではイケチョウガイは 1998 年、カラスガイは 2013 年を最後に（鈴木、2018）生息記録はない。また、イシガイとドブガイ類の減少も著しく（萩原ほか、2017）、生息環境は悪化していると考えられる。しかし水質汚濁に強いとされるヒレイケチョウガイ交雑種の自然水域への定着が散見されることから、モニタリングの継続が重要と考えられる。